

とよなかかたで

とよなか物語

伝統芸能二昧

巻頭対談 とよなか魅力対談

爆笑の上方落語に
この人あり

笑福亭仁鶴さん × 小佐田定雄さん

2017 March

Vol.7

目次

とよなか魅力対談

爆笑の上方落語にこの人あり

2

特集とよなかで伝統芸能三昧

日本最古の芸能 能に親しむ

5

もっと身近に伝統芸能

7

命の響きがする楽器

寄席三味線、期待の新星

芸で「心」を伝えたい

ねじり鉢巻、粋でいなせな「かつぼれ」

世界最古のオーケストラ「雅楽」を楽しむ

片岡リサ先生に聞く「邦楽ミニ講座」

伝統芸能にふれる子どもたち

13

片岡リサ Kids 邦楽塾

能楽・仕舞ごども教室

とよなかグラフィティ

15

豊中市には、全国的にも珍しい「伝統芸能館」があり、市民が気軽に古典芸能や大衆芸能に親しむことができます。また、市内に在住する能楽師や落語家による演能会や落語会が定期的に開催されるなど豊中は伝統芸能が根づいたまちでもあります。今号では、身近なところで伝統芸能に親しめる豊中の姿をご紹介します。



笑福亭仁鶴さん

落語家

小佐田定雄さん

落語作家

巻頭対談

とよなか魅力対談

市内在住で上方落語界の重鎮である笑福亭仁鶴さんに、半世紀を超える落語家生活を振り返ってもらうとともに、豊中での暮らしについて落語作家の小佐田定雄さんを聞き手として語っていただきました。

豊中の環境が気に入って

小佐田 仁鶴師匠は昭和36年（1961年）に入門されてもうすぐ56年になられますが、豊中にはいつからお住まいに。

仁鶴 昭和46年にこちらにきました。

小佐田 ということは人生の半分以上、豊中で暮らしておられるということですね。

仁鶴 そうですね。いながいこと暮らすとは思わなかったんですが、まあ便利よろしいですね。千里中央では何でも買えることができますし、新御堂筋を使えば大阪へ行くのもあっという間。空港も近いし新幹線に乗るのもすぐですから、非常に便利のええところだと思います。

爆笑の上方落語にこの人あり

上方落語との出会い

小佐田 師匠が落語家になるのと同じように、私は昭和28年ごろ初代桂春團治のし

家のすぐ裏が島熊山なんですけど、島熊山というのは万葉集にも詠まれた古い山やそこですね。私が来たころはキジもいる、タヌキやキツネもいて、蛭も飛んでいるようなところで非常に環境が良くて気に入ったんですね。豊中に来てから仕事も大変順調でした。方角も良かったんですよ。今も自然が残っていて暮らしやすいんですよ。

笑福亭仁鶴さん

Profile

1937年生まれ。豊中市在住。1961年六代目笑福亭松鶴に弟子入り、三代目笑福亭仁鶴を名乗る。1965年深夜ラジオのDJで若者の絶大な人気を得る。1970年には週10本以上のレギュラー番組を抱え全国で人気が沸騰。「視聴率を5%上げる男」との異名を持つ。タレント活動と同時に古典落語を大切にし独演会を全国で開催。上方落語を若者に浸透させた功労者となる。NHKの長寿番組『バラエティー生活笑百科』の司会でもお馴染み。2005年からは吉本興業の特別顧問に就任。1970年大阪府民劇場 奨励賞、1972年日本放送作家協会賞 演芸部門、1974年上方お笑い大賞 大賞、1994年大阪市民表彰 文化功労賞、2002年日本放送協会 放送文化賞。



文化芸術センターを初めて見て「立派なホールでびっくりしました」と感想を話す笑福亭仁鶴さん。

撮影場所：豊中市立文化芸術センター 和室

小佐田定雄さん

Profile

落語作家。1952年、大阪市生まれ。77年に桂枝雀に新作落語『幽霊の辻』を書いたのを手始めに、落語の新作や改作、減んでいった噺の復活などを手がけた。近年は落語だけでなく、狂言、文楽、歌舞伎の台本にも挑戦している。著書に『5分で落語のよみかき』三部作（PHP研究所）、『落語大阪弁講座』（平凡社）、『枝雀らくごの舞台裏』、『米朝らくごの舞台裏』（ちくま新書）などがある。

小佐田 私も聴きましたが面白かったです。私が初めて仁鶴師匠の噺を聴いた時も、ものすごく早いと思うんです。声もよっぴり早い。六代目笑福亭松鶴師匠に入門したのはどんないきさつですか。
仁鶴 自分でも落語をやってみたくなって、素人参加番組に出るようになったんです。その番組で松鶴師匠が審査員をされたので顔見知りになって。何より初代春団治に雰囲気が出ていて、入門をお願ひに行ったらいいです。
小佐田 すぐにOKが出ましたか。
仁鶴 私が24歳やったから「ちょっと遅いな」と言われたのと、当時は落語で生計が立てられるかどうかからいって

言われました。落語家が上方全体で20人前後しかおらず、今みたいにあちこちで落語会があるわけでもなかったから。こちら「好きやから」というだけで、頑張ってあかんかったら他を考えたらいえ、今くらいに思っていました。

初代桂春団治と上方落語

小佐田 松鶴師匠とは違って吉本興業（株）に所属することになったのはどういふわけですか。
仁鶴 三代目林家染丸師匠が、私の落語を見て「吉本向きや」と紹介してくれはったんです。当時は吉本興業に所属する落語家が少なく、増やしたかったという事情もあったんですな。

小佐田 その時から初代春団治のようにやってはったんですか。
仁鶴 勝手に真似てましたからね。インタビューされたら、いつも「初代春団治の



王であり大切な人です」と答えたんです。それが「四天王」の始まりやと言ったことなんです。後から考えたら、他にも師匠方がおられて先輩方全部のおかげなんです。
小佐田 なるほど。しかし弟子をたくさん育てたという点では、この4人の師匠方の功績は大きいですね。

芸はお客さんによって変わる

小佐田 松鶴師匠から怒られた思い出はありませんか。
仁鶴 落語のやり方については、何も言われませんでした。テレビに出るようになって、落語をおろそかにしたらあかんと言われたくらいです。

小佐田 松鶴師匠は、吉本の劇場に見に来はったことあるんですか。
仁鶴 私が中腰で落語をやっているという噂が立って、なんば花月に見に来はったことがあります。それには理由があった。千人が入るなんば花月は縦長で後ろのお客さんの顔が見えへんくらい遠い。そこから後ろのお客さんにも笑ってもらおうと思つて、無意識に中腰になってたんです。うーん、師匠は後で楽屋に来て、「この劇場やったら、あれでええんや」と言ってくれはりました。

小佐田 落語のネタをやってはったんですか。
仁鶴 最初はね、落語会で受けてた「くっしやみ講釈」をやったんです。そしたら誰一人笑わなかった。これでは吉本を



レコードを聴いて落語を知りましたと言っていました。だいが経ってからふと気がついたんです。松鶴の弟子やのにこんなこと言つて「ええんや」って。それで、ある時師匠にお詫言を言つたら「わしも若い時は真似してたんや」とうまいこと言ってくれはりました。
小佐田 確かに、初代春団治は誰もが崇拜してましたな。
仁鶴 崇拜してましたし、影響を受けてない人はいないですよ。

小佐田 ないですね。桂米朝師匠でさえ影響を受けてはった。あの方がいてなかったら、今の上方落語はなかったかもしれませんな。
仁鶴 そうです。あの人がレコードをぎょうさん残してなかったら、どうなっていたやろと思ひますね。

小佐田 実は私は仁鶴師匠のラジオを聴いて落語会に初めて行つたんです。師匠にとっての春団治が私にとっての仁鶴師匠な

クビになるなあと思ひました。でも、お客さんが何を期待しているか考えて、自分で小咄を作つてやったら受けた。お客さんの呼吸がわかってきたら、落語のネタも笑つてもらえるようになります。
小佐田 師匠は漫才や新喜劇と闘いながら高座を務めておられたんですな。
仁鶴 昔は15分の持ち時間で笑つてもらうために必死でした。今はその必要がないのならええ時代です。落語は笑いだけでなくストーリーをきっちり描写してネタの魂がお客さんに伝わっていかんことにはあきません。古典芸能といつても時代の空気に合わせていかな受け入れられませぬ。初代春団治はラジオやレコードと他の人がやらんことをやりました。今の時代に求められていることを考えて自分なりに工夫する。お客さんが求めているものを考えたら、自然にそうなるといふもんです。噺家の芸はお客さんにつくられて、その人間が持っているものが伝わっていくんです。



©山岸伸

日本最古の芸能

能に親しむ

大阪府内に9か所ある能舞台のうち、市内には府内最古の住吉神社能舞台と、豊中不動尊紫苑閣能舞台があります。このうち紫苑閣能舞台では、市民の実行委員会に能楽師や能面師も加わって、国内トップレベルの能面コンテスト「島熊山能面祭」が開催されたり、体験会が企画されたりしています。600年の歴史を誇り、ユネスコ世界無形文化遺産にも登録されている「能楽」。市内での取り組みをご紹介します。

能面に宿す心を表現する 「島熊山能面祭」



島熊山能面祭では、梅若玄祥さん・大槻文藏さんという2人の重要無形文化財保持者（人間国宝を含む）、7人の能楽師による数次にわたる審査が行われます。「能舞台で使えるかどうか」を基準に、能楽師自らが表現力や品位などを総合的に評価

する全国でも珍しい能面コンテストです。10回目を迎えた昨年は、全国から187面の応募があり、うち28面が入選となりました。

当初から実行委員会の運営に関わる能面師の鳥畑英之さんは、「能に携わる専門家と市民が一緒になって創り上げる能面コンテストは他にはありません。この豊中から能の魅力を伝えていきたい」と話します。

8月21日に行われた表彰式では、入選作品を能楽師が個別に講評。梅若家・大槻家に代々伝わる能面の公開もありました。さらに、9回目を数える島熊山能面祭「梅若玄祥特別公演・通小町」も同日開催され、入選した能面をつけて梅若玄祥さんが「通小町」を舞うという貴重な機会も設けられました。



第10回島熊山能面祭 大賞 大槻文藏賞「慈童」

表紙の能面は、
(右)大賞 梅若玄祥賞「小面」
(左)特別賞 豊中市長賞「霊の男」



とりはでひでき
鳥畑英之さん（能面師 千成町）

現代能面師の第一人者堀 安右衛門師に師事。平成17年「第20回国民文化祭ふくい2005能面の祭典 新作能面公募展」において福井県知事賞受賞。

能面は美術品ではなく、能で使われてこそ面に命が宿るのです。芸能とはもともと、人間の力を超えるものに対する畏れや敬いといった神への祈りから始まっています。私たち能楽師は、一つひとつの能面に魂が宿っていると考えていて、能面をつける時にはその魂に向かって「礼するのが習わしです。そして、舞台上で舞うことで、能面に命が吹き込まれていきます。能面を打つ時には、何の曲に使うか、何を表現するかを考えていただきたい。そのためには実際の舞台をより多く観てもらいたいと思います。島熊山能面祭は、長年続いていることに価値があります。20年、30年と続いていくことで後世に残る優れた能面が生まれるのです。



「島熊山能面祭」によせて
梅若玄祥さん（観世流能楽師シテ方）

お能って なあ〜に？

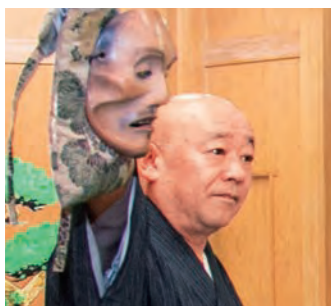


応募された能面を審査する大槻文藏さん（観世流能楽師シテ方）
表彰式では「内面からにじみ出る美しさや感情の深みを表現してもらいたい」と講評されました。



が好きで、何度か観ています。最初の朗読で自然にストーリーが頭に入ってきます。こんなに身近な場所でも本格的な能楽が演じられているのとてもうれしい」と感想を話してくれました。

敷居が高く感じることもある「能楽」を もっと気軽に楽しんでもらおうと、緑丘在住の観世流能楽師の山本博通さんが平成18年に紫苑閣能舞台で体験講座「お能ってなあ〜に？」を開催しました。今では、講座の参加者を中心に設立された実行委員会が、毎年様々な催しを企画しています。



やまもとひろみち
山本博通さん
観世流能楽師シテ方 日本能楽会会員、重要無形文化財（総合指定）保持、関西学生能楽連盟顧問、大阪能楽協会特別教育委員、正花会・名古屋観舞会主宰。



「梅若玄祥特別公演・通小町」
主役（シテ）の深草の少将の霊を
梅若玄祥さんが舞いました。



豊中の能舞台

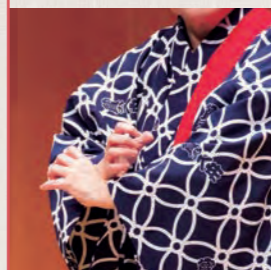
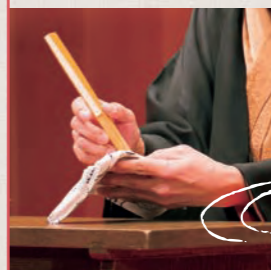
住吉神社能舞台（服部南町2-3-31）
国登録有形文化財（建造物）。明治31年（1898年）に大阪博物館の観能施設として造られた能舞台。総松造で、天満宮を経て住吉神社に移設されました。

豊中不動尊 紫苑閣能舞台（緑丘2-14-18）
豊中不動尊境内には、万葉集にも詠まれた島熊山の歌碑があります。能舞台は、能楽の他、狂言の稽古場や発表会などにも活用されています。



もつと身近に伝統芸能

豊中には、能や落語の他にも
 伝統芸能や大衆芸能の様々な分野で活躍する人がたくさんいます。
 観るもよし、仲間として参加するもよし、気軽に伝統芸能に親しんでください。



命の響きがする楽器

村下正幸さん(和太鼓・津軽三味線・篠笛奏者 上野西)

父親が立ち上げた和太鼓サークルに小学1年生から参加していた村下正幸さん。中学校の文化祭で同級生と一緒に太鼓を演奏した楽しい思い出が、これまで活動を続けてきた原動力です。高校では和太鼓部に所属して創作太鼓に魅了されました。

蓮風のパートナーである友岡宣仁さんとは大学時代からユニットで活動し、地域の催しなどに出演してきました。現在、一番力を入れているのが学校公演。平成28年(2016年)は近畿を中心に約40校で公演しました。そこでは、日本の伝統楽器の多くは、生き物の命の生まれ変わりであることを伝え、木を伐り出すところから始まり、牛の革を張る太鼓づくりの様子をていねいに紹介します。

「命をテーマにした活動に行き着いたのは、佐渡島を拠点に世界で活躍する太鼓芸能集団『鼓童』での研修体験がきっかけです。太鼓の技術だけでなく、昔ながらの米作りや釣った魚を自分で捌く調理体験を通して、自然への感謝と命の営みの循環を実感。さらに能、狂言、茶道の所作から伝統に培われた精神を学びました。蓮風の活動を通して子どもたちに命の営みを伝えていきたいと思ったのです」。

太鼓に加えて高校時代から津軽三味線を習い、さらに篠笛も演奏する村下さん。和楽器の音色に魅せられ、一人でも多くの人に和楽器に親しんでもらいたいと話します。



友岡宣仁さん(左)との二人弾き。



和太鼓・津軽三味線を使った路上パフォーマンスからスタート。平成15年に和奏ユニット「蓮風 RENPU」を結成し、平成21年より本格的なプロ活動を開始。樹齢約250年の大木で作られたくり抜きの大太鼓(胴直径1m26cm)の迫力ある響き、力強い津軽三味線の二人弾き、繊細な音色の篠笛と、多彩なパフォーマンスで活躍中。

「学びの機会を提供」

学校公演に際しては、太鼓ができるまでの写真と解説をまとめた資料を事前に貸し出して、子どもたちの理解が深まるよう支援します。公演当日は、子どもたちが実際に楽器に触れながら学ぶ時間を設けています。

太鼓楽器店から写真の提供を受けて、村下さんが自作した資料。写真提供：株式会社浅野太鼓楽器店



三味線、太鼓の革、革が張られていない和太鼓のくり抜き胴を展示。



公演終了後子どもたちは自由に楽器に触れて手触りや重さを感じる体験をします。



寄席三味線、期待の新星

高校で芸能文化科に学び、芸術大学に進学した岡野鏡さん。演劇の道をめざしていましたが、高校で習った落語にひかれて落語会に足を運ぶうちに、^{はな}断の世界を一緒につくる寄席三味線方になりたいと高橋まきさんに弟子入り。2年間の修行期間中は、師匠宅に毎日通い、三味線の稽古だけでなく、朝から晩まで生活を共にしてきました。「三味線の技術だけでなく、言葉遣いなど日常の振る舞い一つひとつに至るまで指導してもらえたことは本当にありがたいことです」。思うように弾けなくて落ち込むことはあるけれど、「辞めたいと思っただことは一度もない」と。今では落語会で弾く機会も増

岡野鏡さん(寄席三味線方 岡町)

えて、一緒に舞台をつくる喜びをかみしめています。「今はまだ、教えられた通り弾くのに精一杯。これから本当の勉強です」と話すのは師匠の高橋まきさん。「基本を学んだ上で、様々な芸能を吸収し、向上心を持ち続けることが必要。芸事には、これで良いということはありません」。若手のホープとして、岡野さんの出番は順調に増えています。「もっと断の雰囲気や場面に合わせて弾けるようにならなくては。落語の奥深さが垣間見え、さらに落語が好きになりました」と笑顔がほころびます。

寄席三味線は細棹を用い、明るく華やかな弾き方が特徴です。



「三味線を習いたい」とツイッターでつぶやいたところ、母親の知り合いで、高橋さんの夫でもある落語家の桂九雀さんからメッセージが届き、入門につながりました。高座を盛り立てる三味線の大切さを知る九雀さんは、高橋さんとともに岡野さんの成長を見守っています。



高橋まきさんは、桂九雀さんの落語会に通うようになったことが縁で、寄席三味線のかつら枝代さん(桂枝雀夫人)に弟子入り。弟子をとり、育てる立場になったことで、かつて自分が師匠から受けたご恩を実感することになりました、と話します。



芸で「心」を伝えたい

旭堂南北さん(講談師 西泉丘)

プロ講師となつて35年の旭堂南北さんは、芸人をめざして漫才の勉強をしていた時、師匠の横山ノックさんに勧められ、講談師への転向を決めました。

「講談は明治時代大変盛んで、そのころの作品が今も演じられています。当時は講談師の口演を速記して新聞に連載したり、講談本を出版したりするなど、大衆文化として人気を博していました」。

駆け出しのころ、旭丘団地で始めた小さな寄席をきっかけに、地域の集まりなどにも呼んでもらい、豊中の人に支えてもらったと振

り返ります。

物語を聴いて場面を想像する楽しさが語り芸の醍醐味。そこに人の情や生きる道を説くのが講談。芸とは「心」を伝えるものという南北さんは、広島出身者として原爆を語り伝えていきたいと、毎年8月に伝統芸能館で開催される「旭堂南北一人語りひろしま」をライフワークとしています。



昨年の第62回豊中芸人倶楽部寄席で口演する南北さん。豊中在住の芸人が集まり、「豊中芸人倶楽部」として20年前から活動。今では伝統芸能館の人気の寄席です。

ねじり鉢巻、粋でいなせな「かつぼれ」

櫻川昇后さん(櫻川流 江戸芸かつぼれ師範 服部本町)

大阪・住吉大社で五穀豊穣を願った「住吉踊」(国重要無形文化財指定)に端を発し、江戸の寄席芸、お座敷芸として発展した

「かつぼれ」。もとは太鼓持ちの踊りなので、リズム感があって、場が盛り上がりやすい。踊る人も観る人も楽しく、気持ちウキウキしてきます」と櫻川昇后さん。伝統芸能館を拠点に活動する「江戸芸かつぼれ同好会」を指導しています。地域の集まりで踊りを披露すると、かつぼれ、かつぼれ、と一緒に口ずさむ方も多く、場が和やかに

東京・日本橋や神戸まつりなどのパレードにも参加しています。



伝統芸能館まつりで練習の成果を発表する江戸芸かつぼれ同好会のメンバー。全員がそろうようになるまで1年はかかるとか。

世界最古のオーケストラ「雅楽」を楽しむ とよなか雅楽倶楽部



管弦の演奏場面。古式ゆかしい装束で宮廷文化の雰囲気をかもしだします。

雅楽は、日本で最も古い由来をもつ音楽。古来の歌や舞に、5世紀から9世紀ごろにアジア大陸から伝わった舞や器楽が加わって、平安時代の貴族文化のなかで集大成されました。華やかな装束を身にまとう舞の「舞楽」や、打楽器、管楽器、弦楽器の合奏で「世界最古のオーケストラ」とも言われる「管弦」などの演奏形態があります。宮内庁楽部が有名ですが、寺社を拠点に活動する民間団体の演奏も各地で行われています。

とよなか雅楽倶楽部は、誰でも気軽に参加できる愛好会として平成19年（2007年）から活動しています。メンバーの年代や楽器経験も様々ですが、「雅楽独特の儼かな雰囲気のある音楽を、自分で演奏できるのが喜び」という気持ちは共通。定期演奏会や豊中市文化芸術祭などに向けて練習に励んでいます。



わらわい 童舞を代表する曲目「胡蝶」は、子どもたちが蝶の羽を付けて飛び跳ねながら可憐に舞う曲です。

雅楽の主な楽器



笙（しょう）
長さの異なる17本の竹を吹き口がついた円筒形の器に差し込んだ構造。発音はハーモニカと同じ原理で、各竹管の先端についたリードが振動して音が鳴ります。いくつもの音を同時に出すことができます。

篳篥（ひちりき）

音量が大きく、存在感のある音色が特徴で、主旋律を受け持ちます。音域が1オクターブほどと狭いため、息づかいや唇の位置で音高を微妙に変える奏法が用いられます。その音は「地上で生活する人間の声」を表していると伝えられています。

龍笛（りゅうてき）

篳篥に比べ、はるかに広い音域をもつ横笛で旋律に彩りを添える役割です。その音はその名のとおり、「空を舞う龍の鳴き声」と言われています。

楽琵琶（がくびわ）

琵琶のなかでは一番大きい琵琶です。ペルシャが起源で、シルクロードを経て奈良時代に日本へ伝わりました。



楽箏（がくそう）
（がくそう）
楽琵琶と同じころに日本に伝わりました。他の箏と構造や材質はほとんど同じですが、指にはめる爪は大きく違っており、竹の節を小さく削り出し、皮で止めたものを使います。



片岡リサ先生に聞く

邦楽ミニ講座

邦楽の特徴

西洋音楽が和音を中心に旋律やリズムで表現することが多いのに対して、邦楽は楽器そのものの音色の特徴を大切にします。多くの場合、邦楽は、西洋音楽のように五線譜ではなく、口伝で伝承されています。演奏者の個性を重視して、楽譜に表現できないニュアンスをも伝えようとしているのです。私も師匠から「楽譜に頼ってはいけない」と言われ、師匠の指使いを見、音を聴くことに集中しました。箏や三味線の調弦は、常に同じ音高で行うヴァイオリンなどと異なり、弾く状況に合わせて行うなど、融通性が高いことも特徴です。



細棹三味線に比べて棹がやや太く、胴も重くつくられている中棹三味線。しっとりとした音色が特徴です。楽器撮影協力：大阪音楽大学

伴奏音楽として発達

鎌倉時代には、琵琶法師が琵琶を弾きながら語る「平家物語」が流行するなど、日本の音楽は物語や歌の伴奏音楽として発達してきました。三味線は、16世紀ごろに琉球（沖縄）を経て日本に入ってきた中国の三弦が改良されたものです。琵琶法師の演奏によつて、撥の活用が進み、歌舞伎にも用いられる長唄は細棹、地歌（上方が発祥の三味線音楽）では中棹、文楽（義太夫節）では太棹と、それぞれ演奏場面に合わせた種類が生まれました。江戸時代に入ると、庶民のあいだにも三味線の愛好者が広まり、民謡などにも用いられるようになって、日本を代表する弦楽器となりました。



こじ 箏の調弦は、琴柱の位置を左右に動かして行います。



片岡リサさん

大阪音楽大学卒業、同大学専攻科修了。幼少より箏・三弦を始め、多数の受賞歴を重ねる卓抜した技術と音楽性が高く評価されている。大阪音楽大学邦楽専攻講師（専攻主任）

三味線とともに広まる

箏は約1300年前、奈良時代に琵琶とともに大陸から入ってきたと言われ、宮廷音楽の雅楽に用いられていました。江戸時代の初めに、三味線の名手でもあった八橋檢校（やっしけんきょう）が、奏法の工夫や曲づくりなどで現在の箏曲の基礎をつくりました。箏の形をした京の銘菓「ハッ橋」にその名前を残すほど、多くの門人を養成して慕われたと言われます。その後、「三味線（地歌）」と合奏されるようになったことで、箏は庶民に広まりました。

さらに、大正から昭和にかけて活躍した箏曲演奏家・作曲家の宮城道雄が西洋音楽の影響も受けた新作を多数発表して、海外にも評価されてきました。

伝統芸能にふれる子どもたち

市内には子どもたちが日本の伝統芸能にふれる機会がたくさんあります。そのなかから箏と能楽を体験し、発表する取り組みをご紹介します。

「片岡リサKids邦楽塾」

(伝統芸能館)

平成28年(2016年)で2回目を迎える「片岡リサKids邦楽塾」では、箏に親しみながら、稽古を重ね、参加者みんなで発表会に挑みます。子どもたちのなかには、学校の先生に勧められて参加した子どももいます。指導に当たった片岡リサ先生は「今年は、二重奏ができるなど、曲の完成度が上がりました。子どもは関心をもって集中すれば、驚くほど上達します。稽古の後の達成感を味わってもらえたら、将来、自分が夢中になれることを見つけたら、自分だけになると嬉しいです」と話します。

参加者のなかでただ一人の男子で、4年生の高本理生くんは、テレビで調弦が自由にできる箏の特徴を知り、触ってみたいと申し込みました。2時間の練習は長かったけど、発表会を目標に最後まで頑張りました。6年生の松本和佳さん、5年生の岡本真依さんは2回目の参加。



修了証を手に全員で記念撮影。

二人とも昨年より上手に弾けるようになってうれしいと話します。



学校も学年も違う13人が練習を重ねて臨んだ発表会。緊張のなかにも一人ひとりが力を出し切りました。

サウンドスクール

豊中市では、平成18年(2006年)から大阪音楽大学と提携し、子どもたちが多彩な音楽にふれる機会を提供するサウンドスクール事業を開始。生の演奏を聴いたり、同大学の学生等による演奏指導の他、中学校では授業のなかで箏の演奏を取り入れる学校もあります。

「能楽・仕舞こども教室」

(紫苑閣能舞台)

「能楽・仕舞こども教室」は、観世流能楽師の山本博通さんから、文化庁の「伝統文化親子教室事業」の一環として開催。昨年で6回目を迎えました。7回の稽古を通して、扇子の扱いから基本の構え、謡の練習まで4人の能楽師による指導を受けます。稽古の最初と最後に大きな声であいさつすることも欠かせず実践。「子どもたちが能楽にふれた経験は、大人になってからもきっと人生の糧になるはず」と山本博通さん。この教室の他に小中学校への出前授業にも積極的に協力してい



全員による「高砂」の連吟の後、グループに分かれて練習してきた仕舞と地謡を交代で披露しました。



ます。

昨年が続いて参加した広瀬朗子さん(5年生)と晴子さん(2年生)の姉妹は二人だけで「合浦^{かほ}」を舞いました。母親の郁子さんは「今年は基本動作がわかってきて、上手にやりたいと意欲が出てきたようです。二人とも大きな声を出して積極的に取り組んでいました。新しいことにチャレンジ



ジして人前で発表できたことは自信につながったと思います」と話します。郁子さん自身も、この教室をきっかけに、能舞台の存在を初めて知るなど、親子で新しい世界にふれる貴重な機会になっているようです。

※仕舞は、能面も装束もつけず、演目のクライマックス部分のみを、地謡だけで演ずる、能楽のダイジェスト版とも言える演能形式。
※連吟とは、謡曲を二人以上で声をそろえて詠うこと。

あなた

温かな真心を贈る

“とよなか”への思いを寄附に込めて

「人と地域を未来につなぐまちづくり」を基本理念とする豊中市がめざすのは、「住んでよかった」と実感できるまち。

その創造のために、寄附を通じて“とよなか”のまちづくりを応援いただいている方々に、寄附に込められた思いをお聴かせいただきました。

子どもたちの教育にかける願い

マリンフード株式会社 代表取締役社長
吉村 直樹さん

新しい時代の主人公となる子どもたちの教育にと、新世紀を目前に控えた平成11年(1999年)から、毎年クリスマスのころにご寄附くださっています。代表取締役社長の吉村さんは、小学生のころから大の読書好き。文学青年時代に才筆の練磨で培った含蓄をもって社員研修に注力してこられた吉村さんなればこそ、やさしい心と強い意志を併せもった子どもたちの成長を願う気持ちはひとしおです。教育には手間ひまが求められるだけに、長い目で見守りながら、その成果を楽しみにしています。

平成26年からは、「マリンフード豊中少年野球場」などのネーミングライツパートナー(※)として、スポーツ振興にも貢献くださり、いわば文武両道での子どもたちのすこやかな育ちを支えていただいているのです。

教育振興基金へのご寄附は、子どもたちの「未来を切り拓く力」をはぐくむ学力向上の支援や、市外先進地域での教職員の研鑽などに役立てさせていただいています。

※「豊中市ネーミングライツ事業」では、市の施設等に事業者の愛称を付与。施設管理費用の一部をご負担いただくとともに、地域活性化に資する事業にも取り組んでいただいています。



子どもたちの学びの充実を願う吉村さん。



学力向上への取り組みに熱気を帯びる教職員研修。



庭の果樹にも丹精のぬくもりを注ぐ鹿島さん。

エレベーターが更新された
服部介護予防センター。



寄附に感謝の思いを託して

鹿島 桂子 さん

結婚を機に豊中市で暮らすようになって57年を数える鹿島桂子さん。ご自身が高齢期にさしかかったころから、市の高齢者福祉に役立てたいと、毎年お誕生日の時期にいただいているご寄附は20回に達します。

7か月の未熟児で生まれ、手厚い養育環境をもたらしてくれた人々の恩を大切にすよう、お父様がしばしば鹿島さんに言い聞かせていたといえます。自由に活動させてくれるお連れ合いへの感謝のうちに、中学校PTA、古文書読解の同好会、17年間に及ぶ民生委員など、地域で幅広く活躍してこられました。この20年ほどは何度も大病に見舞われました。

何とか健康を取り戻した時に、書の先生から贈られた書作品の「今こうして生きていることに感謝したい」という言葉が鹿島さんの座右の銘となっています。そんな思いを込めた社会福祉事業基金へのご寄附は、高齢者関係施設の整備などに活用させていただいています。

お礼に高校野球発祥の地 “とよなか”の記念品を

平成30年の夏の高校野球・第100回記念大会を控え、高校野球発祥の地“とよなか”にちなんだ記念グッズを、平成29年度にご寄附くださる皆様へのお礼としてご用意しています。(詳しくは、市ホームページでご覧いただけます。)